

〈研究・調査報告〉

子育て家庭における父母の就業状況、 育児参加状況、ストレスの関係の基礎的検討 —育児参加状況に関する父母間の認識のずれに着目して—

大内 善広 ・ 野澤 義隆 ・ 萩原 康仁

【要旨】

本研究では、就業との両立が求められる平日に着目し、父母の就業状況を踏まえた上で、育児の参加状況についての時間による評価と自己評価、および配偶者からどのように思われていると感じているかの評価という三つの育児参加状況の評価の関連性について検討した。その上で、自己評価と配偶者からの評価の認識とのずれと、夫婦関係満足度や育児ストレスとの関連について検討した。その結果、父親に関しては勤務状況によらず、育児参加状況に関する3項目の回答間の相関係数が高い傾向が示された。一方で、母親については、父母ともに標準時間勤務あるいは長時間勤務である場合に、自己評価と配偶者からの評価の認識との間の相関係数について高い傾向が見られたが、それ以外の勤務状況の場合にはこの相関係数が低い傾向が見られた。また、自己評価と配偶者からの評価との認識のずれについては、父親が長時間勤務で育児参加について過小評価されていると感じている場合に父親の夫婦関係満足度が低く、育児負担感が高くなる傾向が見られた。母親については、父親が長時間勤務であり母親が長時間勤務ではない家庭において、育児参加について過小評価されていると感じている場合に、夫婦関係満足度が低く、育児不安感について高くなる傾向が示された。

キーワード：育児参加状況の認識のずれ、就業状況、夫婦関係満足感、育児ストレス

1. 目 的

政府が統計を取り始めた1980年以降、共働き家庭は年々増加している。1997年には、男性雇用者と無業の妻から成る世帯（以下、「片働き世帯」と表記する）より雇用者の共働き世帯（以下、「共働き世帯」と表記する）が多くなり、2018年の共働き世帯数は片働き世帯数の2倍以上となっている（内閣府，2019）。このように働き方が変化する中、夫は外で働き、妻は家を守るという、いわゆる性役割分業意識は、男女ともに反対する者の割合が年々増加傾向にある。2016年には、性役割分業に賛成する者の割合を反対する者の割合が上回った（内閣府，2019）。

育児期夫婦においては、核家族化や家族規模の矮小化と相まって、家事や育児を祖父母に頼ることが難しくなりつつあることから、父親が家事や育児を担う重要性が高まりつつある（池田，2010）。しかし、夫の家事や育児への取り組み状況は、必ずしも十分な状況とは言えない。6歳児未満の子を持つ夫が、1日のうちに家事・育児関連に費やす時間は83分（内、育児時間は49分）であり、年々増加しているものの、他の先進諸国と比較して低水準にとどまっている（内閣府，2019）。また、片働き世帯、共働き世帯に関係なく約7程度の夫が育児に取り組めてなく、家事については片働き世帯は約9割、共働き世帯は約8割の夫が取り組めていない状況がある。一方、約7割の父親は育児に参加したいと思っている（工藤・山本・望月，2013）ことから、父親にとって、育児に対する理想と現実乖離があると考えられる。

このような理想と現実の乖離については様々な要因が想定されるが、一つの要因として、就労問題がある。一般社団法人中央調査社（2012）は、男性の育児参加が低い理由について、「仕事におわれて、育児をする時間がとれないから」が71.5%と最も多い結果を示している。他方、内閣府（2019）は、週間就業時間が60時間以上の雇用者の割合は、女性よりも男性の方が高く、約5倍との結果を示している。特に、子育て期にある30代、40代の男性は、週間就業時間が60時間以上の割合が高い。また、2017年度における男性の育児休業取得率は、民間企業が5.14%、公務員（国家公務員と地方公務員）は平均すると7.7%である一方、女性は民間企業が83.2%、公務員は平均すると100%であり、男女間で大きな差があることがわかっている。以上をまとめると、育児や家事に参加したいと思っている夫は一定数存在すると思われるものの、就労上の制限により、理想とする家事や育児への参加が叶わない状況が存在していると考えられる。

父親が就労により育児や家事への時間を割けない場合、現代の家庭においては、母親の家事や育児の負担が大きくなる。実際に、1日あたりの母親の家事・育児関連時間は父親の5倍以上であり、他の先進諸国と比較して最も高い水準であることがわかっている（内閣府，2019）。つまり、母親は、父親に対してもっと家事や育児に協力してほしいと思っても、十分な協力が得られにくい状況にあると考えられる。このような育児の協力について、父親は群を抜くサポート源であり（諏訪・戸田・堀内・田丸・角本，1997）、育児の協力者がいる母親は精神的疲労やイライラ感が有意に低い（横山・清水・由良・早川，1997）ことが示されている。しかし、育児の協力者が得られない場合、孤立した子育てによる精神的疲労やイライラなどの、いわゆる育児ストレスを抱えやすく、かつ夫婦関係にも影響することが想定される。そのため、父親が就労により時間を確保しづらい中でも、自分なりに育児に取り組んでいると考えていたとしても、夫の育児行動が妻の期待しているほどでなかった場合に夫婦関係満足度に影響することや（田中，2010）、育児についての夫の自己評価と妻の夫評価には認識のずれがあることが示唆されている（田村・倉持・中澤ほか，2002；中澤・倉持・田村ほか，2003）。よって本研究では、就労との両立が求められる平日に着目して父親の育児に関する自己評価と配偶者からの評価の認識との関連性について検討し、特にそれらの認識のずれと夫

婦関係満足度や育児ストレスとの関連について検討する。

2. 方 法

(1) 調査方法

2019年2月にマクロミル社に依頼しインターネット上で調査を行った。未就学児の子どもがいる父母子ども全員が同居している家庭という条件でスクリーニングを行い、412件の有効な父母のペアデータが得られた。

(2) 調査項目

勤務状況、育児参加状況、夫婦関係満足度、育児ストレスについて、それぞれ父母ともに回答を求めた。

勤務状況：就業状況、週あたりの勤務時間について尋ねた。

(1) 就業状況：「1. 勤務していない（育休・産休）」「2. 勤務していない（育休・産休以外）」「3. 正規雇用」「4. 非正規雇用（派遣・契約・非常勤・パート等）」「5. 自営業・家族従業員」「6. その他」で尋ねた。なお、「6. その他」と回答した場合には、その内容について自由記述での回答を求めた。

(2) 週あたりの勤務時間：「1. 週 10 時間未満」「2. 週 10～20 時間」「3. 週 21～30 時間」「4. 週 31～40 時間」「5. 週 41～50 時間」「6. 週 51～60 時間」「7. 週 60 時間以上」の 7 件法で尋ねた。なお、(1) 就業状況において、「1. 勤務していない（育休・産休）」「2. 勤務していない（育休・産休以外）」のどちらかで回答していた場合は回答を求めなかった。また、「6. その他」に回答し、勤務時間がない場合には、「1. 週 10 時間未満」と回答するよう求めた。

育児参加状況：平日における育児参加状況について、それぞれ時間、自己評価、配偶者からの評価の認識の 3 項目を尋ねた。

(1) 時間：「1. していない」「2. 1～30 分未満」「3. 30 分～1 時間未満」「4. 1 時間～2 時間未満」「5. 2 時間～4 時間未満」「6. 4 時間～6 時間未満」「7. 6 時間以上」の 7 件法で尋ねた。

(2) 自己評価：「1. 全くしていない」から「5. いつもしている」の 5 件法で尋ねた。

(3) 配偶者からの評価の認識：配偶者から見て自分がどれくらい育児に参加していると思われると感じているかについて「1. 全くしていない」から「5. いつもしている」の 5 件法で尋ねた。

夫婦関係満足度：諸井（1996）の夫婦関係満足度尺度を使用し、6 項目で各 4 件法にて尋ねた。

育児ストレス：井上・柳田・深見・深野（2014）などを参考に項目を作成した。負担感、時間のなさ、不安感についてそれぞれ 3 項目用意し、各 5 件法にて尋ねた。

(3) 倫理的配慮

研究実施に際し、城西国際大学研究倫理委員会に研究計画を提出し、承認を得た（承認番号：06F190048）。

3. 結果と考察

(1) 就業状況の集計

分析に際し、就業状況についての回答を確認したところ、「6. その他」と回答したデータが4件あり、自由記述の内容は「専業主婦」と回答したデータが3件、「単発バイト」と回答したデータが1件であった。「専業主婦」と回答したデータは「2. 勤務していない（育休・産休以外）」、「単発バイト」と回答したデータは「4. 非正規雇用（派遣・契約・非常勤・パート等）」に回答したと見なし、以降の分析を行った。

まず、勤務状況についての回答を集計したところ、Table 1 のような結果となった。

Table 1. 勤務状況に関する度数分布

勤務実態		1.勤務していない (育休・産休)	2.勤務していない (育休・産休以外)	3.正規雇用	4.非正規雇用 (派遣・契約・非常勤・パート等)	5.自営業・ 家族従業
父親		6 (1.5%)	15 (3.6%)	339 (82.3%)	25 (6.1%)	27 (6.6%)
母親		76 (18.4%)	185 (44.9%)	49 (11.9%)	89 (21.6%)	13 (3.2%)
週あたりの勤務時間		1.週10時間未満	2.週10～20時間	3.週21～30時間	4.週31～40時間	5.週41～50時間
父親		9 (2.2%)	13 (3.2%)	8 (1.9%)	51 (12.4%)	157 (38.1%)
母親		16 (3.9%)	31 (7.5%)	32 (7.8%)	42 (10.2%)	24 (5.8%)
		6.週51～60時間	7.週60時間以上			
父親		84 (20.4%)	69 (16.7%)			
母親		4 (1.0%)	2 (0.5%)			

各家庭における勤務状況について検討するために、勤務実態において「1. 勤務していない（育休・産休）」「2. 勤務していない（育休・産休以外）」と回答した人を「勤務なし」、それ以外の回答をした人で週あたりの勤務時間の回答が「1. 週 10 時間未満」「2. 週 10～20 時間」「3. 週 21～30 時間」「4. 週 31～40 時間」であった人を「標準時間勤務」、「5. 週 41～50 時間」「6. 週 51～60 時間」「7. 週 60 時間以上」であった人を「長時間勤務」と群分けした上で、父母の勤務状況のクロス集計を行ったところ、Table 2 の結果が得られた。

Table 2. 父母の勤務状況に関するクロス集計

	母親			計
	勤務なし	標準時間勤務	長時間勤務	
勤務なし	15 (3. 6%)	2 (0. 5%)	4 (1. 0%)	21
父親 標準時間勤務	48 (11. 7%)	30 (7. 3%)	3 (0. 7%)	81
長時間勤務	198 (48. 1%)	89 (21. 6%)	23 (5. 6%)	310
計	261	121	30	412

(2) 育児参加状況の集計

育児参加状況についての回答を集計したところ、Table3 のような結果となった。

次に、父親と母親それぞれについて平日の育児参加状況に関する 3 項目の回答の相関関係を検討するために、それぞれポリコリック相関係数を算出した (Table 4)。分析に際し、回答の得点が高いほど育児に参加しているという形となるように、自己評価および配偶者からの評価については得点を逆転させた。それぞれのポリコリック相関係数に対して Wald 検定を行ったところ、いずれも 5%水準で有意であった。

Table 3. 育児参加状況に関する度数分布

時間		1.していない	2.1～30分未満	3.30分～1時間未満	4.1時間～2時間未満	5.2時間～4時間未満
父親		74 (18. 0%)	121 (29. 4%)	101 (24. 5%)	69 (16. 7%)	38 (9. 2%)
母親		2 (0. 5%)	7 (1. 7%)	6 (1. 5%)	48 (11. 7%)	69 (16. 7%)
		6.4時間～6時間未満	7.6時間以上			
父親		3 (0. 7%)	6 (1. 5%)			
母親		52 (12. 6%)	228 (55. 3%)			
自己評価		1.いつもしている	2.時々している	3.どちらともいえない	4.あまりしていない	5.全くしていない
父親		111 (26. 9%)	110 (26. 7%)	34 (8. 3%)	110 (26. 7%)	47 (11. 4%)
母親		382 (92. 7%)	19 (4. 6%)	6 (1. 5%)	4 (1. 0%)	1 (0. 2%)
配偶者からの評価		1.いつもしている	2.時々している	3.どちらともいえない	4.あまりしていない	5.全くしていない
父親		172 (41. 7%)	92 (22. 3%)	29 (7. 0%)	66 (16. 0%)	53 (12. 9%)
母親		293 (71. 1%)	55 (13. 3%)	11 (2. 7%)	38 (9. 2%)	15 (3. 6%)

Table4. 育児参加状況に関するポリコリック相関係数

	時間-自己	時間-配偶者	自己-配偶者
父親	.713	.568	.678
母親	.606	.165	.332

時間による評価では、本データにおける父親の 82.0%が少なくとも 1 分以上は育児に参加していることになるが、最も多い回答は 1～30 分未満と、平日においてはあまり育児に参加できていない状況が示された。母親については、6 時間以上という回答が最も多く、育児の中心が母親となっている実態がここでも明らかとなった。このことは、自己評価による回答でも、母親の 92.7%がいつもしていると回答していることから窺える。一方で、配偶者からの評価の認識に関しては、父親はいつもしていると回答している割合が自己評価よりも高くなっているのに対して、母親は自己評価よりも低い割合となっていた。このような認識のずれに関して、ポリコリック相関係数の結果から見てみると、父親は 3 項目の回答間で全て中程度から高い相関係数となっているのに対して、母親は配偶者からの評価の認識とその他二つの評価間で低い相関係数となっていた。このことは、特に母親において、自分が育児をしていると感じているからといって必ずしも父親から育児をしていると評価されていると感じていないという傾向を示唆している。

続いて、父母の勤務状況によって、平日の育児参加状況に関する 3 項目の回答の相関関係が異なる可能性を考慮し、父母の勤務状況別にポリコリック相関係数を求めた。なお、父親が勤務していない場合、および、父親が標準時間勤務であり母親が長時間勤務の場合に関してはデータ数が少ないため、分析から除外した (Table 5)。

Table 5. 父母の勤務状況別での育児参加状況に関するポリコリック相関係数

	父親			母親		
	時間- 自己	時間- 配偶者	自己- 配偶者	時間- 自己	時間- 配偶者	自己- 配偶者
父標準, 母なし(n=48)	.733*	.820*	.877*	.846*	.342	.069
父標準, 母標準(n=30)	.648*	.234	.537*	.694*	.395	.769*
父長時, 母なし(n=198)	.732*	.593*	.683*	.376*	.033	.072
父長時, 母標準(n=89)	.680*	.574*	.699*	.509	.149	.193
父長時, 母長時(n=23)	.602*	.590*	.626*	.747*	.668*	.771*

*は 5%水準で有意

父母の勤務状況別に見てみると、父親に関しては勤務状況によらず、平日の育児参加状況に関する 3 項目の回答間の相関が同様の傾向であった。ただし、父母ともに標準時間勤務である場合にのみ、時間による評価と配偶者からの評価の認識間の相関係数が低かった。母親については、父母ともに標準時間勤務あるいは父母ともに長時間勤務である場合に、自己評価と配偶者からの評価の認識間の相関係数について高い傾向が見られたが、それ以外の勤務状況の場合には相関係数が低い傾向が見られた。この結果は、父親と同様の勤務状況となっている場合には、母親は自己評価と比べても適切に父親から育児状況について評価されていると感じているという傾向を示していると言えよう。

(3) 育児参加状況の認識のずれと夫婦関係満足度、育児ストレス

自分の育児参加状況の認識が、配偶者からの評価の認識とずれが生じているかどうかについて、父母の勤務実態別に検討した。まず、自己評価および配偶者からの評価の認識について、「1. いつもしている」「2. 時々している」と回答したものを高群、「3. どちらともいえない」「4. あまりしていない」「5. 全くしていない」と回答したものを低群とした上で、これら高低の組み合わせで4群に分類した。具体的には、自己評価で育児によく参加していると評価し、配偶者からもよく育児に参加していると思われると感じている群（HH群）、自己評価で育児によく参加していると評価しているが、配偶者からはあまり育児に参加していないと思われるというように、育児参加について過小評価されていると感じている群（HL群）、逆に、自己評価では育児にあまり参加できていないと評価しているが、配偶者からはよく育児に参加していると思われるというように、育児参加について過大評価されていると感じている群（LH群）、自己評価では育児にあまり参加できていないと評価し、配偶者からもあまり育児に参加していないと思われると感じている群（LL群）の4群に分類した。父母の勤務実態別に、父母それぞれで各群の度数の集計を行ったものが Table 6 である。

Table 6. 育児参加状況の認識に関する群ごとの度数分布

	HH群	HL群	LH群	LL群
父標準, 母なし(n=48)	28 (58.3%)	3 (6.3%)	4 (8.3%)	13 (27.1%)
父標準, 母標準(n=30)	17 (56.7%)	2 (6.7%)	5 (16.7%)	6 (20.0%)
父親 父長時, 母なし(n=198)	85 (42.9%)	10 (5.1%)	39 (19.7%)	64 (32.3%)
父長時, 母標準(n=89)	38 (42.7%)	6 (6.7%)	14 (15.7%)	31 (34.8%)
父長時, 母長時(n=23)	11 (47.8%)	2 (8.7%)	4 (17.4%)	6 (26.1%)
母標準, 母なし(n=48)	42 (87.5%)	4 (8.3%)	2 (4.2%)	0 (0.0%)
母標準, 母標準(n=30)	26 (86.7%)	2 (6.7%)	1 (3.3%)	1 (3.3%)
母親 父長時, 母なし(n=198)	165 (83.3%)	32 (16.2%)	1 (0.5%)	0 (0.0%)
父長時, 母標準(n=89)	74 (83.1%)	14 (15.7%)	0 (0.0%)	1 (1.1%)
父長時, 母長時(n=23)	17 (73.9%)	3 (13.0%)	1 (4.3%)	2 (8.7%)

父親が長時間勤務の場合、父親は自己評価として育児にあまり参加していないと感じている傾向が見られ、育児参加状況についての認識がずれている場合においては、過小評価されていると感じている父親の割合よりも、過大評価されていると感じている割合が多いことが示された。一方で、父親が長時間勤務であり母親が長時間勤務ではない場合に育児参加状況について過小評価されていると感じている母親の割合が、過大評価されていると感じている割合よりも高い傾向が示された。

この育児参加状況の認識のずれの有無が夫婦関係満足度や育児ストレスとどのように関係しているのかを検討するために、まず、父母の各群における夫婦関係満足度、育児ストレス

の負担感、時間のなさ、不安感について記述統計量を算出した（Table 7）。なお、各尺度得点は、関連する項目の得点の平均値で計算した。

その上で、勤務状況別に同様の集計を行い、平均値の差の検定を行った。勤務状況別に集計する際、HH 群、HL 群、LH 群、LL 群の相対度数分布に鑑みて、父親については、父親の勤務時間が長時間の場合（Table 8）を取り上げて 1 要因分散分析を用いて分析した。なお、多重比較には LSD 法を用いた。また、母親については、父親が長時間勤務であり、母親が長時間勤務ではない場合について、HH 群と HL 群のみを取り上げて t 検定により分析した（Table 9）。

父親が長時間勤務の場合には、育児参加について過小評価されていると感じている HL 群は、自己評価で育児によく参加していると評価し、配偶者からもよく育児に参加していると思われていると感じている HH 群と比べて夫婦関係満足度が低く、育児負担感についても他の群と比べて高くなる傾向が見られ、仕事で多忙である状況において、育児参加状況の認識のずれはネガティブに影響することが示唆された。

Table 7. 育児参加状況の認識に関する群別の夫婦関係満足度・育児ストレスの記述統計量

		HH群	HL群	LH群	LL群
父親	夫婦関係満足度	3.16(0.59)	2.78(0.65)	3.08(0.65)	3.00(0.65)
	負担感	1.77(0.79)	2.32(0.97)	1.77(0.83)	1.88(0.81)
	時間のなさ	2.81(1.04)	2.85(0.86)	2.67(1.14)	2.73(1.01)
	不安感	2.61(1.01)	2.72(0.91)	2.65(0.98)	2.63(0.96)
母親	夫婦関係満足度	3.07(0.74)	2.75(0.80)	3.23(0.33)	2.72(0.38)
	負担感	2.42(1.06)	2.57(1.12)	2.67(0.92)	3.28(0.45)
	時間のなさ	3.58(1.09)	3.73(1.07)	2.93(1.20)	3.17(0.25)
	不安感	3.00(1.11)	3.38(0.97)	3.53(0.40)	3.17(0.32)

Table 8. 父親が長時間勤務の場合の父親に関する分析結果

	HH群	HL群	LH群	LL群	F	多重比較
夫婦関係満足度	3.18(0.58)	2.85(0.58)	3.14(0.62)	3.02(0.65)	2.31+	HH>HL
負担感	1.66(0.70)	2.20(0.89)	1.74(0.87)	1.77(0.76)	2.71*	HL>HH,LH,LL
時間のなさ	2.76(1.06)	2.65(0.70)	2.67(1.12)	2.65(1.02)	0.28	
不安感	2.50(1.03)	2.63(0.82)	2.73(0.97)	2.64(1.01)	0.83	

+は 10%水準、*は 5%水準で有意

Table 9. 父親が長時間勤務で母親が長時間勤務でない場合の母親の分析結果

	HH群	HL群	t
夫婦関係満足度	3.07(0.75)	2.72(0.81)	2.86*
負担感	2.39(1.08)	2.60(1.11)	1.21
時間のなさ	3.58(1.06)	3.69(1.09)	0.64
不安感	2.99(1.11)	3.45(0.99)	2.62*

*は 5%水準で有意

母親については、父親が長時間勤務であり母親が長時間勤務ではない家庭において、父親が長時間勤務である場合の父親と同様に、育児参加について過小評価されていると感じている HL 群は、HH 群と比べて夫婦関係満足度が低い傾向が示された。また、育児不安感についても HH 群と比べて HL 群が高い傾向が見られた。

以上の結果から、父親が長時間勤務であり母親が長時間勤務ではない家庭の母親や、自身が長時間勤務である父親が、育児参加状況について過小評価されていると感じている場合に、夫婦関係満足度が低く、一部の育児ストレスが高い傾向にあることが示唆された。

【参考文献】

- 池田心豪（2010）ワーク・ライフ・バランスに関する社会学的研究とその課題—仕事と家庭生活の両立に関する研究に着目して—。日本労働研究雑誌，52(6), 20-31.
- 井上和博・柳田信彦・深見真也・深野佳和（2014）保育園児を持つ母親の育児ストレスとその関連要因との関係。鹿児島大学医学部保健学科紀要，24(1), 35-42.
- 一般社団法人中央調査社（2012）父親の育児参加に関する世論調査。
<https://www.crs.or.jp/backno/No659/6592.htm>（閲覧日：2020 年 1 月 8 日）。
- 工藤英美・山本理絵・望月 彰（2013）父親と母親の育児の共同化の実態と課題—全国調査（保育・子育て 3 万人調査）の経年比較より—。人間発達学研究，(4), 9-24.
- 諸井克英（1996）家庭内労働の分担における衡平性の知覚。家族心理学研究，10(1), 15-30.
- 中澤智恵・倉持清美・田村 毅・岸田泰子・木村恭子・及川裕子・森田千恵・荒牧美佐子（2003）出産・子育てで体験が親の成長と夫婦関係に与える影響（4）—第一子出生後の夫婦関係の変化と子育て—。東京学芸大学紀要，第 6 部門，技術・家政・環境教育，(55), 111-122.
- 内閣府（2019）令和元年版 男女共同参画白書
- 諏訪きぬ・戸田有一・堀内かおる・田丸尚美・角本典子（1997）埼玉県における子育ての実態と母親の育児ストレス—1 歳児を保育園に預けて働く母親の場合—。鳥取大学教育学部研究紀要報告，39, 83-129.
- 田村 毅・倉持清美・中澤智恵・岸田泰子・木村恭子・及川裕子・荒牧美佐子・持田恭子・森田千恵（2002）出産・子育てで体験が親の成長と夫婦関係に与える影響（1）—出産前後の面接調査のまとめ—。東京学芸大学紀要，第 6 部門，技術・家政・環境教育，54, 41-56.
- 田中恵子（2010）父親の育児家事行動・夫婦関係満足度の変化と母親の育児ストレスとの関連性。人間文化研究科年報，(25), 215-314.
- 横山美江・清水忠彦・由良晶子・早川和生（1997）多胎児をもつ母親の心身の疲労と育児協力状況。日本公衆衛生雑誌，44(2), 81-88.

付 記

本研究は、2016～2019 年度科学研究費助成事業（基盤研究 C）「自己決定理論に基づく父親の主体的な育児参加を促す保育者の取り組みの研究（課題研究番号：16K04182、研究代表者：城西国際大学 大内善広）」の補助を受けて行われた。また、本論文の一部は、日本教育心理学会第 61 回総会で発表された。